

2023 年 1 月 18 日

2022 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

ひとりひとりの経験に寄り添う：
周産期喪失を経験した家族の
お話会運営での配慮

Honoring Each Family Member's Experience
Through Their Story Telling in A Group About
The Perinatal Loss: A Qualitative Study

21-MW-003

加藤 早来

【目的】

周産期喪失を経験した家族に対する地域における支援,特に少人数で開催されるお話会の運営上の工夫や配慮に焦点を当て,家族への支援の実際を明らかにし,記述することである.

【方法】

周産期喪失を体験した家族への地域支援を展開している1大学の運営スタッフ4名を対象に2回のグループ面接を行った.以下の①～⑧の項目に沿ってどのように配慮しているかについて面接を実施し,質的に内容を分析した.①事前相談,②事前ミーティング,③グループ分け,④受付・ルール説明,⑤自己紹介,⑥進行・ファシリテーション,⑦会の終わりの時間,⑧事後ミーティング.

インタビューデータは,テープ録音した後,逐語録に書き起こし内容を分析した.内容の解釈に間違いがないかについて,対象者から確認を得るプロセスを経ている.尚,本研究は,聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号:22-A037)を受けて行なった.

【結果】

本研究で示された配慮内容は28項目であり,主な配慮は,①事前相談:お話会のイメージを持てる配慮,②事前ミーティング:その人の経験したことを大切に扱う配慮,③グループ分け:似たような経験をしている人たちのグループ分けで話に入りやすくする配慮,④受付・ルール説明:自由奔放な会になることを抑制し,安全にグループを進めていく配慮,⑤自己紹介:喪失体験の話をして大丈夫と感じてもらふ配慮,⑥進行・ファシリテーション:相手の話を全て受け止める配慮,⑦会の終わりの時間:会終了後の気持ちの変化を伝えて,予め参加者が知識を持つことで気持ちの変化に身構える配慮.⑧事後ミーティング:スタッフとしての言動を引きずりにくく,切り替えるきっかけにもなる時間である.

それらの中核的な配慮は,3つの柱《1. 孤独感・孤立感を感じさせない配慮》,《2. パターンや枠に当てはめず,ひとりひとりの経験に寄り添う配慮》,《3. スタッフが成長し,かつ疲弊しないように守る配慮》が認められた.

【結論】

地域でのお話会では,参加者が安心して共感できるような環境が重要であり,孤独感を感じてしまいそうになる場合には臨機応変にファシリテートしていく配慮が重要である.

参加者の背景や喪失体験は,唯一無二な個別な体験であり,マニュアル化できない.運営スタッフは,周産期喪失を経験した家族との丁寧で尊厳のある一対一の関わりを大事にしていた.様々な喪失体験に応じた支援をできるように,支援者の人材育成することが今後の課題である.

運営スタッフの共感疲労を予防するために,事後ミーティングで会の振り返りの機会を設けてお互いの心のケアを実施していることが明らかとなった.この運営上の工夫は,スタッフが疲弊しないためにも重要な時間となっていることが示された.